

幼 兒 の 教 育

昭 和 二 十 二 年 二 月

服 装

——保姆諸君と語る—— (二)

倉 橋 惣 三

保姆諸君は御婦人である。その御婦人ミ服装に就て語るこゝは、あらゆる意味に於て最もむづかしいこゝである。或は紳士(即ち私)の作法でないかも知れない。それは皆さんの心に最も微妙に觸れるこゝだからである。従つて、うつかりしたこゝをいふミ、お氣にさわりさうなこゝだからである。お氣にさわらないまでも、お氣になさうなこゝだからである。少くも、「あなたの教養が足りない」ミいふよりは、「あなたの風がおかしい」ミいつた方が、何層倍か強くお氣にさわることであり、「互に修養に意を用るませう」ミいふよりも、「皆さん服装に氣をつけませう」ミいつた方が、その時から直ぐ氣苦勞をさせるこゝになり易いからである。兎に角く、へたに持ち出さない方がいゝ話題らしい。

氣にされるばかりではない。或は、袖を翻へして、「男の癖に女の服装のこゝなんか……」ミ、叱られるかも知れないし、笑はれるかも知れない。しかし、先づ充分御諒解を願つて置かなければならないのは、この話題の下に、男からの注文、殊に私(即

ち紳士の一人)の注文を貴女貴嬢に持ち出さうと思つてゐるのでないことである。若し萬一さうだつたら、「貴君の好みなんか合つても合はなくても構はないですわ、ぞ、よ、ミ一言のミに斥けられても仕方がない。素より私にはそんな權利もない。併せて興味もない。天下の幼児保育者として皆さんを見るだけであり、それを要求するだけで、お召物の色合ひや繕柄や、乃至お着つけが、私の趣味に合ふや否やは、勿論大問題じやあない。

が、皆さん。皆さんは幼児の皆さんである。あんまり變つた風をして下さるミ、幼児がびつくりする。さうかするミ、氣の小さい子が、あなたその日のいでたちに驚いて、落ちついてその日の保育が受けられなかつたりする。私は、ただ、それが、そつと見るに見かねて、念のため、おそろく、御注意申上げて見るに他ならない。あなたのためミ言つて失禮なら、幼児のために。

但し、或る人々がいふやうに、幼稚園は仕事場だから、服装なんかさうでもいゝミいふのではない。幼稚園は、幼児には仕事場であることもあるかも知れないが、保母さんには決してたゞの仕事場なんていふ、單純にして殺風景なものではない。仕事ミは仕事である。幼稚園は保母さんのたゞ働くところではなくて、女性ミして生きるところである。従つて、服装だつて、働くのに便利ならそれだけでいゝミいつた勞働服では濟まされない。そこには感情がなければならぬ。感情は個性のあるところのみに伴ふ。すなはち、感情をもつ服装、個性のある服装でなければならぬ。

服装なんか構はない、さいふ言葉がある。服装に構ひ構ふて、明け暮れ服装にのみ心をやつしてゐるのに相對する豪語ミしての言葉であらうが、構ふミ構はないミの間に、もう一つ、あたりまへのところがある筈である。構ひ過ぎるのが服装に着られてゐるのならば、構はな過ぎるのは服装を着てゐないミ同じである。簡單質素も粗野までいつては人間の服装の部にはいらぬ。粗野ほぎ子ぎものきらひなものはないであらう。その證據に、粗野な服装の先生の組の幼児は粗野な子になる。毎日、いやだくミ思つてゐるからである。

ところで、それよりも多くこゝで問題になるのはおしやれの方である。

おしやれが問題になる點は、程度の強さ趣味の低さである。服装を問題とする以上、それに適當の意を拂ふさいふ意味で、ほんまうのおしやれには是認を表してゐる譯であるが、それは程度が先づ第一條件である。程度は何の程度か。羽織を二枚重ねる譯にもいかんし、帶を二本締めるこゝも出来ない。程度は自分の姿に氣のかけ方の程度である。明日の勤務のこゝよりも何を着んと思ひ煩つて(古い本の語ばかりあるおしやれ先生、保育室の硝子に映つす己が姿を花を見て(古い唄の句)幼児のこゝなんか忘れてゐるおしやれ先生、若し斯ういふ古い本や古い唄にあるやうな保姆さんがあつたら、幼児からは抗議を申し込まなければならぬ。「先生もう少し斯の道のこゝを考へて下さい。」「もうちつこ僕達のこゝを考へて下さい。」「お若いんだから御尤もこ思ひますがね。」「それはく先生はおきれいでゐらつしやるんですけれどもね。等、等」。

次に、趣味の低さに至つては、若しそれが多少でも問題になる程だつたら、幼児は抗議を申し込む前に、先づいやになつて仕舞ふであらう。うんざりして仕舞ふであらう。そして互にいひあふだらう。「やりきれないねえ。」「あれでいゝと思つてゐらつしやるんだらうか。」「さうかしてゐるね。」「幼稚園をきこだと思つてゐるんだらうねえ。」「幼稚園よりも往復の途の方を大事にしてゐらつしやるんだよ。」「あゝけばくしてゐるは目がきらくして僕達注意がましまらないで困るよ。」「それより胸が悪くなるよ。」「あれがお前の先生かいつてお母さんが驚いてゐたよ。等、等」。

そんなら、さういふ服装が趣味が低いのかと問はれると、幼児は勿論、私にもよく分らない。更に元來趣味の低い御自身に分らないのも當然であるかもしれない。しかし、たゞ一つ私にいへるこゝは、自分よりも服装の方が先きに、又力強く、人に印象するやうな風は、服装本位の晴れの場でもない限り、常の生活としては明かに低趣味だといふこゝである。自分を強めて目立たせやうとする程下品なこゝはない。